

出藍文庫

1-1

雪解け

近藤貴弥 著

ある冬のことであった。中庭の梢は葉を落とし、凧の中で寂しげに佇んでいる。

日課の有魂書を太宰治に命じた司書は館長から特務の報せを受け、助手である菊池寛を司書室へ呼び寄せた。寛のスカートから煙草の臭いが漂い、司書は微かに眉間に皺を作った。

寛は普段と変わらない潜書を命じられるのだろうと思っっているのか、その顔はどこか柔らかい。釘を刺そうと真面目な調子で伝えるが、寛の表情は変わらなかった。

「特務です」

「またか」

「またです」

特務内容に目を通させると寛の顔から笑みが消え、苦い声が漏れる。司書はその声を聞き、ある一つの可能性を見出した。

「何か知っているんでしょか……?」

「ああ……ちょっとな」

答えが返ってきたがどうにも歯切れが悪い。

司書は司書という務めを果たしているが、文豪という人間を夏目漱石や森鷗外という有名な文豪しか知らなかった。しかも、その知っているというものは彼等の名前を知っているという程度のものであり、彼等が何をしたのか、どういう作品を書いたのか、あるいは他の文豪とどういう関係を築いたのか、ということとはほとんどいいほど知らなかった。大学や高校の時に聞いたような気がするが、全く思い出せない。ゆえに当然、菊池寛という男がどういふ文豪あり、どのような文豪と深い関わりを持っているのかも知らなかった。

図書室に寛を初めとする文豪達の本は置いてあるのだが、図書室は今では文豪達が入り浸り、司書が軽い気持ちで足を踏み入れていい場所ではなかった。夜になればエントランスの暖炉前で佐藤春夫や谷崎潤一郎達が談笑している。その輪に入ったこともあったが、司書の知識では彼等の言っていることが全く理解できなかった。

ならば何故、寛が助手を務めているのかというと、初めに助手を務めていた堀辰雄の推薦からであった。曰く、僕よりも彼の方がこういうことに向いている、と。広い範囲を守ってくれる、と。

助手が他の者を推薦するということは確かなのだろうと思い、司書は寛を助手に任命した。寛は司書よりも文豪達のことを知っており、その関係性もよく知っていた。のみならず、有碍書の際にはその才を遺憾なく発揮し、数々の勝利を司書に報告するほどだった。

「誰を出すのが適任だと思いますか？」

「俺が、行く」

司書はいつもの調子で寛に尋ねた時、熱のある調子と共に答えが返ってきたことに驚いた。驚いたのと同時に確信した。

寛は生前、この件と関係している。

寛が有碍書に行くのは、助手という役目もあり当然過ぎるほどに当然だった。

しかし、その双方を任せ重荷になるようならば、尾崎紅葉や江戸川乱歩に代理で潜ってもらおうと考えていた。

特務は普段の任務とは違う。

特務先で何か、不測の事態が起こることは十二分に有り得る。寛が助手を勤められなくなる

ことも、頭のどこかに置いていた方が良いのかもしれない。

「僕はこの特務と菊池さんの関係を全く知りませんが、何かあることだけは察することができました。特務先で何が起こるか僕も菊池さん自身も分からないと思いますので、一つ条件があります」

「条件？」

「特務の間、菊池さんには、助手から外れてもらいます」

「……保険か？」

「……と、言いますと？」

「こう考えたわけだ。俺が向こうに行っている間、何が起こるか分からない。戻ってきたとしても、俺がそのまま助手を務められるかどうか定かではない。ならば他の誰かを、立てようと」

「その通りです。その通りですが、幾つか付け加えたいことがあります。これらのことは、菊池さんに特務に集中してもらうためです。菊池さんもご存知の通り、僕の未熟さゆえに助手の仕事は増えました。そんな僕でもこの特務は、助手菊池寛を向かわせるよりも、文豪菊池寛を向かわ

せる方が良いと思いました」

「それで、代わりの助手は？」

「誰がいいでしょうか……？」

司書は困ったように笑い、寛は緊張の糸が解けたように朗らかに笑った。

司書は抽斗から煙草と燐寸を取り出し、火を点す。

文学書が蝕まれ、人々の記憶から消え去ってしまう。その対策として派遣された特務能力者^{アールケミスト}が司書である。館長から、きみは司書としての自覚を持った方がいいと苦言を呈されるのは、当然だった。

図書館内は本に害があるため禁煙だが、司書室だけは特別に喫煙を認められるようになった。それまでの喫煙所は中庭しかなかったが、愛煙家の文豪達から寒いと苦情が入り、司書自身も煙草の度に司書室を離れるようになり、一時は中庭が司書室代わりになることさえあった。

館長に相談したが中々認可されず、実績が積み重なってくるとようやく司書室での喫煙が認められるようになった。

寛も胸元から煙草と燐寸を取り出し、火を点す。紫煙を吐き出し、助手候補の名前を挙げる。

「夏目先生か森さんで良いんじゃないか？」

「……森さん？」

「なんだその反応」

「苦手なんですよねえ……。なんていうか、こう、軍人軍人してるところがあって。規律第一みたいな感じで上下関係もすごく厳しそうですし」

「陸軍軍医総監だからな」

「そんな方がどうして小説を……？」

「……書きたいことがあったんじゃないか？」

「陸軍軍医総監なのに？」

「陸軍軍医総監だからこそ、だな。それで、森さんに頼んできたらいいのか？」

「この流れで森さんに代行頼むのはちょっと、おかしくありませんか？」

「それじゃ、夏目先生にするか？」

「いや、でも夏目さん転生してから忙しそうじゃありません？」

転生してからの夏目漱石は部屋に籠っていることが多かった。司書が声をかけても、反応は返ってくるが心ここにあらず、という印象を受ける。司書の心配を気にせず、寛は笑う。

「夏目先生だから仕方ない」

「いいんですか……？」

「アンタが気にすることじゃないから、大丈夫だ」

「では、お願いします」

「それじゃ決まりだ。特務はいつからだ？」

「年の瀬からです」

「引き継ぎやっておく」

「ありがとうございます。僕もやれる範囲でやりますね」

話しが終わり寛も司書も、再び煙草に火を点け、燻らせると廊下から慌ただしい靴の音が聞こえてくる。有魂書に向かっていた太宰が司書室に顔を出したかと思えば、その頬は、微かに紅

潮しており目は潤んでいる。

司書は何事なのかと驚いた調子で尋ねる。

「何かありましたか？」

そう言い、煙草の火を消した。

太宰は扉から廊下の方に身体を向け、奥から訪れる者に声をかける。その声は今までに聞いたことがないほど興奮に震えていた。

「あの、先生！ こっちですー！」

「……先生？」

何事なのかと司書は寛を見上げる。寛の口元を覆う手の隙間から、色濃い笑みが溢れているのが見えた。寛は太宰と司書に背を向け、司書と同じようにまだ吸える煙草の火を灰皿に押し付けた。その時、寛の口が微かに動き、幾つかの言葉を紡いだのを司書の耳は捉えていた。

太宰の案内で司書室を訪れた文豪は、司書も初めて見る顔だった。涼しい顔をした色の白い男。線が細く身丈が高いためか、一層儂げに見える。男は司書を見ると人懐っこい笑みを浮かべ

る。涼しそうな顔から想像できないほど無邪気で子供のような笑みだった。

「はじめまして、僕がこの図書館の司書です。あなたは？」

「やあ、はじめまして。僕は芥川龍之介です」

そう名乗った男は胸元から何かを取り出そうとする。しかし、途中でその動きは止まる。

「はい、禁煙？」

司書は灰皿を机の端に動かす。

「ここだけ喫煙できます。他は禁煙です」

司書は芥川龍之介について、やはりほとんどいいほど知らないことだらけだった。夏目漱石や森鷗外という名前を見聞きした時に、芥川龍之介という名前も見聞きしたと思うが確かではない。それでも、寛の反応を鑑みるに、彼と芥川は何か関係しているのだろう。太宰も関わっているような気がする。司書は芥川龍之介の名を冠した小説の新人賞があること、そこに太宰治が関わったこと、佐藤春夫や川端康成という幾人もの文豪が関わっていることを思い出した。ということとは、菊池寛と芥川龍之介の関係もそこにあるのかもしれない。

寛は自身の胸元から一本の煙草を差し出し、芥川に手渡す。

「よお、龍。久し振りだな。ないんだろう、やるよ」

「寛……久し振り」

親しみを込めて芥川をそう呼ぶ寛に、司書は先程の寛の態度を思い出していた。芥川は指貫きの黒い手袋で、煙草を受け取ると慣れた手付きで燐寸を擦り、火を灯す。一服すると軽いね、と微笑した。

芥川が転生したのは、偶然ではないような気がする。司書の頭上を超えた何かが——その何かはいわゆる運命や宿命という言葉にまとめられるようなものだった——芥川をここに呼び寄せたのかもしれない。

何故この世に再び生を授かったのか、芥川自身も分からないだろう。寛だけは芥川が転生した理由を分かっているような気配を覚えた。助手菊池寛としてではなく、文豪あるいは人間菊池寛としての部分で、芥川という存在を知っているゆえかもしれないが、あくまで予測に過ぎない。

もしかすれば、今回下された特務というものも関わっているのではないだろうか。

特務「受験生の手記」を浄化せよとの報せ。芥川龍之介の転生が同時期に起こったのは何も、一切の偶然ではないような気がしてならなかった。

しかし一切が偶然であったにせよ、なかつたにせよ、司書が芥川にできることは多くない。今までの文豪と同じように図書館を案内し、何のために転生をしたのかを教え、結成に加わらせ、任務に当たらせる。

司書にはその程度しかできず、他のことをしようという気も起きない。

それは司書が彼等のことについて知らないことが多過ぎるからというのも関わっているだろうし、文学を守るための戦力と心のどこかで割り切っている。だからこそそのためにも無知であり続け、淡々と命じ、報告を聞く。

それで文学が失われないのであればそれで良かった。しかしその胸には寛の振り絞るように言った、熱い言葉がいつまでも響いている。

「何があった……どうして……」

その言葉を汲み取ろうとしても司書はあまりに無知であり、司書自身無知であることを恥じた。寛が潜書で助手業を離れている間、夏目漱石が助手を務めることになった。その時に、菊池寛について教えてもらってもいいのかもしれない。

※

司書の助手を離れた寛は、食堂で遅めの昼食を摂りながら悩んでいた。

寛の悩み事は大きく分けて二つあった。

一つは、潜書までの間に何をしようかということ。普段ならば、司書室で煙草でも燻らせ、出撃の時を待つのだがもう、そういう身分でもなくなった。

一つは、つい先程、転生し青い顔で昼食を摂る、芥川龍之介のことであった。

司書の説明を受ける芥川は転生したということについては驚くことはなく、落ち着いた様子

に見えた。事の委細を聞き、芥川は大変な時に呼ばれちゃったね、と困ったように笑った。

その時、特に司書の中に特務の説明はなかった。まだ、芥川が特務を当たれる域まで達していないと判断したからであろう。特務は、その性質上、急を要する。芥川が戦えるようになるまで待てない、と考えたに違いない。

そもそも、司書は芥川を結成に加える気でのだろうか。芥川が余剰戦力であることは、誰もが分かっていることだろう。

前線に立っている泉鏡花はその性格上、交代を望むかもしれないが、泉鏡花との交代は戦力の大幅低下に繋がる。司書が首を縦に振るとは考えにくい。

文学を守るために転生させたはずの文豪を戦場に立たせないつもりならば、一体芥川は何のためにこの世に再び生を授かったのだろうか。寛はこの世に再び生を授かり、文学のために戦うことに強い使命感を思い出した。

文学のみならず、文人のために再びこの生を全うし、戦えることが嬉しかった。転生当初は前の人生ではできなかった生き方をしようと考えてみたが、やはり寛は文豪達を守り、争いを避け

させ、文芸に集中できる環境を用意する方が性に合っていた。

芥川はそんなことを微塵も思っていない。そんなことを思う男ではない。この男は戦いや戦争という野蛮なところから対極に位置する男だ。寛が守らなければならない男の一人だ。誰よりも文学を愛し、愛された男。

ここまで言い切れるのは、寛と芥川が生前からの知り合いだったからだ。それも、終生の友と呼べるほどの。

一高の時分に出会い、寛が京大文科に転科した後、芥川達東大の学生は「新思潮」という同人誌の発行した。松岡や成瀬、芥川、寛という学生の中に、既に戯曲作家として名を馳せ、後に「受験生の手記」を書くに至る久米正雄を加えた、この五名が、各々原稿を持ち寄り発行した雑誌である。

「新思潮」発行に最も力を尽くしたのは久米正雄といっても過言ではなかった。あるいは、夏目漱石によるところが大きかったといえる。

寛はそれほど夏目漱石の影響や寵愛を受けていないのだが、久米や松岡、特に芥川などは強

い影響を受けていたらしい。夏目漱石は毎週木曜日を面会日としており、木曜会という会がで
き、その会の人間はいつしか漱石山房と称されるようになった。山房の人間は小説家、戯曲作家、
俳人、哲学者等、夏目漱石という一時代を代表する作家の元に集うに相応しい肩書を持ってい
た。

久米は戯曲作家としての一面はこの時既に持ち合わせていたのだが、学生という立場ゆえか
ある種の遠慮や敷居の高さ、居心地の悪さを覚えていた。そこで、夏目漱石を第一の読者とする
本を作れば、自分達も他の木曜会の面々と同じような立場に立てるのではないかと思ひ、久米
が松岡や成瀬、芥川に声をかけ、第四次「新思潮」という雑誌を発行する手筈を整えた。

赤門出身ではない寛が第四次「新思潮」に携われたのは久米達と一高時代の顔馴染みであり、
本来であれば久米達と同じように東大文科で学ぶはずだったからだ。それが京大文科で学ぶよ
うになったのは一高の時分のとある行為により、一高を退学になったためだ。一人京都で学ぶの
は寂しかろうと思つた久米が、寛に同人誌の発行および寄稿について書簡を認めたのである。そ
して、夏目漱石が亡くなり、夏目漱石を第一の読者として続けられていた第四次「新思潮」は追

悼号を發行し、その役目を終えた。

それほどの時から菊池と芥川は知り合い、芥川が死ぬまで支え合つた。彼がどういふことを考へているのか、ある程度のこととは、分かる。付き合ひが長くてもある程度と思つてゐるのは、芥川が一切を包み隠さず告白したことがないからである。

「寛、一つお願いがあるんだけどいいかな」

そんな芥川が媚びるような声を上げたが、寛は最後まで聞くことなく一蹴した。

「諦めろ」

「まだ言つてないじゃないか」

「司書室以外は禁煙だ」

「外も？」

「外は吸える」

「中庭は？」

「訊きたいことがある」

「ここじゃないといけない？」

芥川は腰を上げ、中庭へ向かう。寛は後ろを追いかける。二人は一言も話さなかった。

芥川が戦場に赴かないとすれば、何のために転生したのか意味が分からない。しかしそれは別にして、転生したということ喜びたいのだが、転生前の芥川のことを思うと喜べない。芥川龍之介の最期はここに居る文豪の大半が知っていることであり、その喪失はもう二度と味わいたくない。何故転生してしまったのか、とすら思ってしまう。永遠に転生しない方が幸せだったのではないだろうか。芥川はこの娑婆苦に満ち満ちた世界を再び生きる気なのだろうか。

寛の脳裏に特務の影が見え隠れし、その心には久米の微笑が思い描かれる。

二人の側を離れている間に、何かあったのだろうか。その精算のために、芥川はこの世に転生したとでもいうのだろうか。

葉が落ちた中庭には誰の姿も見えない。冷たい風が二人の間を通り抜ける。

芥川は身震いを一つ起こし、胸元から一本の煙草を取り出した。見慣れた指に見慣れた煙草が戻ってきた。

「寛、燐寸ある？」

寛は燐寸を手渡しながら問う。

「それは？」

「太宰くんから」

芥川は笑顔を浮かべ、その煙草を味わう。寛も煙草を味わう。

この特務が過去の特務と同じ性質を有しているのならば、「受験生の手記」の浄化後に久米が転生する可能性がある。その時、芥川が転生した理由も明らかになるのだろうか。

寛は自嘲を出すのを堪える。そもそも、人間一人が生を授かったことに、他の何者かが強く関わっているという発想が、思い過ぎしなのではないだろうか。

もっと別の何かが、芥川を此岸に呼び戻したのではないだろうか。

二人は煙草の火を消し、一息吐いた。寛が問うと、芥川の涼しい目元が微かに翳った。

「戦えるか？」

「どうして戦うんだい？」

「司書が言っていただろ」

「文学を失わせないため、だっけ？」

「そうだ。それで？」

「僕が戦う意味なんてない」

「そう言うと思っただぜ」

芥川は迷うことなく言い切った。その瞳には諦めや失望の色が刻まれている。寛はその答えに安心したように笑う。

「それにね、消え去るものは消え去るんだよ。僕達がどれほど守ろうとしても、ね」
「たとえそうだとしても、この灯火は消させたくない」

大学を卒業した寛は時事新報に入社し取材を重ね、幾つもの記事を書いた。

それから芥川と同じ大阪毎日新聞の社員になった。新聞社の社員として一定の収入を得て生活安定させてから作家生活を始めたのである。

芥川は海軍士官学校で教鞭を執っていたが、大阪毎日新聞で小説家として連載を持つように

なった。教師と小説家という二足の草鞋を履くのではなく、小説家という仕事に集中したかったためである。

教鞭を執った場も連載を持った新聞社も違うが、その道程は恩師である夏目漱石と同じ道程であった。新聞社と小説家の契約内容は、夏目漱石の時と変わらず、小説家が不利になるような契約であった。しかし新聞連載を楽しみにする読者の傾向だけは変わっていた。寛の発表した「真珠夫人」という通俗小説が、人気を博したのである。

けれども、技巧を散りばめられた小説や私小説の人気も根強く残っていた。

寛が通俗小説を書き続けたのは先の時事新報で取材を重ね、現実や生活から書を知ったからだ。

あるいは芥川が存在があり、技巧的な小説を書かないようにしていたのかもしれない。芥川は寛とは反対に、夏目漱石や森鷗外や古典や漢籍や西洋の文学に影響を受け、書から人生や世界を知った。そんな男と同じ舞台上で筆を執れば、著しい劣等感に苛まれてしまう。県立高松中学校の頃、寛は誰よりも英語ができたが、一高に進学してからの英語の成績は乙だった。地方で生

まれ育った寛の発音が正しくないというのが原因だった。築き上げられた自尊心が傷付けられ、あんな思いは二度としたくないと思った。

ゆえに寛は自分の書けるものを書くようにした。寛にとって大切なものは、芸術や小説という頭の中や言語の内で展開されるものではなく、地に足着いた生活であり、現実だった。その生活や現実を真摯に捉えれば、芸術や小説や文学というものが見えてくるのではないだろうかと考えたのだ。

生活を第一に考えた寛であるが、何も芥川達の芸術を中心とした考えを軽く見ていたわけではない。同じ小説家として敬服の念すら懐いていた。

そしていつしか、新聞社の連載や総合雑誌である「中央公論」や「改造」とは違う、彼等のような文人のための雑誌が必要なのではないか、頼まれて書くのではなく自らが自らのために作品を発表できるような雑誌が必要なのではないか、と考え寛は「文藝春秋」という雑誌を創刊し、文藝春秋社を立ち上げた。文藝春秋には芥川も参加しており、毎月作品を発表してくれた。

その雑誌から生まれた小説家や評論家は多く、横光利一や川端康成や小林秀雄などその代表

格だろう。司書曰く、文藝春秋はまだ社として存続しており、文藝春秋も毎月発行されているとのことだった。

「きみは頑張ったよ」

「頑張ってなんかないさ」

「今も残っているんだろう？ 凄いことだよ。誇らしいことじゃないか。凄いよ。本当に。きみはよく、そんなに戦えるね」

芥川の口から零れたいくつもの言葉には、強い羨望や憧れの情がはつきりと出ていた。寛は寂しそうに微笑する芥川を直視しないように煙草に手を伸ばした。慰めるような言葉や同情をかけようかと思ったが、芥川は自らの手で自らの生涯を閉じた男であり、寛よりもずっと激しい戦いに身を投じていた。

寛や志賀直哉や谷崎潤一郎のように凶太い神経を持っていなかった、あまりに細くたおやかな神経である時代を生きていた。

寛が文人達を守るために戦えたのは、寛自身の生活が安定していたためである。結婚後も妻

との間には大きな衝突は起きず、「真珠夫人」や文藝春秋で得た小金もあった。

芥川の場合はずいぶん生活が安定せず、そこから戦いの連続だった。生活のために戦い、創作でも戦った。夏目漱石の絶賛を受け文壇に登場した芥川は、それまでに文壇になかった新しい文学性を有していた。毛色の違う小説家や先輩諸氏からの妬みや嫉みを受けたのである。それでも芥川は創作を続け、原稿用紙の升目を埋め、次々と作品を発表していた。

そんな生活を十年程度繰り返してたある時、芥川は自殺した。

寛は今でも覚えていいる。ある夏の暑い日のことである。烈しい雨が降り続いた朝である。芥川の心身が正常の状態ではないことは既に周知の事実だった。芥川の自殺の報せを受け大いに驚き、動揺した。しかし、心のどこかに諦観から生まれた、芥川ならば自殺しても仕方がないであろう、という思いがあった。仕方ないであろうと思ったところで、芥川の自殺を認めたというわけではない。寛は今でも、自死することはなかったではないか、と思っている。

血の気を失った芥川の顔を見た時、その顔にはっきりとした安堵の微光が漂っていた。寛は安心し、同時に言葉を失い、涙した。

そんな男がこの世に再び生を授かった。志半ばで死んだのであれば、かつての生の続きを行うことだろう。自らの生に自らで幕を下ろした芥川は、この二度目の生をどうする気なのだろうか。「これからどうする気だ？」

芥川は子供のように笑った。

「図書館へ行こう。川端くんや横光くんの新しい話あるんだろう？ 谷崎さんや志賀さんだって。全部読みたい。きみの戯曲も読み直そう。朔太郎くんの詩もいいね。正岡さんの俳句も。正宗さんの評論も気になるね」

それらの言葉のどこにも絶望や失望で濡れた気配は見られない。図書館へ向かう芥川の背中を追いかけ、寛は安らかに微笑した。

それでも胸には小さな波が立っては消え、消えては立ちと繰り返している。寛はこの芥川の姿をどこかで見た記憶がある。

学生の時分だっただろうか。東大を卒業し、教鞭を執っていた頃によく似ている。和洋漢の書を読み込み、いずれの文学も愛してやまない芥川であり、死の間際まで永遠に文学を愛し続け

た姿である。文学青年のまま生き、死んだ文豪。

寛は不安を拭おうとしたが、芥川の過去と芥川自身の姿が目の前にあり完璧に不安を拭えなかった。その不安は、生前と同じような一生を歩むのではないかという予感を芽吹かせていた。

※

転生してからの芥川の日常は平穩そのものだった。一人図書館で、本を読む。本来であれば煙草で口の寂しさを癒やすのだが、禁煙となれば堪えるしかない。しかしじきに堪えられなくなり、中庭で一服することにした。コートを羽織り、本と煙草を片手に中庭で読書ができるのではないかと思ったが、司書から本を汚すようなことはやめてほしい、と止められた。空腹を覚えれば食堂へ足を運び、読書に疲れれば気分転換に馴染みの顔と昔話や世間話に花を咲かせる。原稿を書かないでいいのは幸せだった。

そんな生活の中で、時々有碍書のために潜書することもあった。侵蝕者という負の感情から

生まれ、本の中から世界を破壊する存在を討ち滅ぼすためだ。もしこの侵蝕者による侵蝕を食い止められないと、文学書は黒く染まり、人々の記憶から奪われ、やがて消え去る。

芥川は司書からその説明を聞いた時、困ったように笑ったが、一人の小説家として何一つ笑えないものだった。芥川は何も後世に自らの名を残したいがために小説を書いてきたわけではないが、それでも自らが書いた小説が、自らの思いが人々の記憶から奪われるのは食い止めたい。芥川龍之介という名が、その名で書かれた小説が、人々の記憶から奪われても構わないだろう。芥川龍之介という人間は、今の時代に生まれ育った人間ではなく、もう過去の人間なのだから。しかし、他の小説家の作品となるとそういうわけにはいかない。

だが、そのために芥川自身が侵蝕者と戦わなければならないのかと思う。芥川は他の文豪と比べると、転生して間もなく、練度も低く、能力も低い。文学を守るのではなく、守られる立場になっている。

司書もその点は理解しているらしく、芥川が有碍書に潜書する時、菊池寛や室生犀星といった高い練度の文豪を共に行かせている。寛はどうやら最初期にこの図書館で文学書を守るため

に転生したらしく、安定感といえは凄まじいものだ。しかし芥川はすぐに侵蝕者の攻撃を受け、不安定な精神を晒し、侵蝕されそうになる。

侵蝕を受けると、司書からの休むように命じられた。ベッドで横になっていると、生前からの精神的な病を、この肉体も引きずっていることが分かった。右目の瞼の裏に幾つもの歯車が現れ、視野を塞いだ。芥川は驚くことなく、片手で右目を覆い隠し、左目の視力が正常であることを確認した。すこし経つと歯車が消えたが、今度は烈しい頭痛を覚えた。その頭痛を覚える度、何もこの肉体と精神に転生する必要はなかったのではないかと切に思う。

文学書を守るために転生した文豪達は、その名や後世への影響に引っ張られていると考えられる。美や性という官能的世界を描いた谷崎潤一郎。その姿に、古典的美意識を深めた様子は見て取れない。陸軍軍医として小説も手掛けた森鷗外。その姿に、歴史小説や史伝を深めた様子は見えない。夏目漱石の絶賛を受け文壇に登場し、晩年に自殺した芥川龍之介。その姿に、作家として最も成熟していた様子は映らない。文藝春秋社長、初代麻雀倶楽部会長である菊池寛。その姿に小説家や戯曲作家の影は見当たらない。

各文豪は、最も人々の印象に残っている要素を寄せ集め、転生してきたようだ。となると芥川の一生の内、最も人々が印象に残っているのは、あの二つの時代なのだろう。学生芥川にとって最も幸福であった時期と、小説家芥川にとって最も不幸であった時期。自らの文学を打ち立てた時期、自らの文学を否定した時期。その二つが合わさり、芥川はこの世に再び生を授かった。しかし、芥川の記憶には自らの一生全ての記憶がある。親友の姿も、婚約者の姿も、子供の姿も。そして、自らが書き残した幾重の文章も。

一体誰が、この娑婆苦に満ち満ちた世界へ芥川を再び生かそうと思ったのだろうか。

小説家である芥川がどのような人生を歩んだのかを知っていれば、誰も芥川を転生させようという気にはならなかったのではないだろうか。文豪達がそう願ひ、司書に転生を乞うたという線は考えにくい。この図書館に芥川と関係している文豪は多い。その自殺に否定的だった者がほとんどということも分かる。しかし、あの死に顔に安心の微光が漂っていたことを知っている文豪が、再び芥川を、という気になるとは思えない。

司書が芥川の転生に関わっていると考えられるが、司書と初めて対面した時の表情を思い返

すとそうとも思えない。芥川の転生を強く願っていた目の色をしておらず、淡泊な調子だった。芥川はああいう目を、海軍士官学校で教鞭を執っている時に何度か見たことがある。戦力として将来使える者はいるかどうか観察する目付きだ。司書は芥川達文豪を文豪として見ているのではなく、一つの戦力として捉えている。

芥川はそんな男の下で戦うのは気に食わない。侵蝕者に襲われ文学書が消え去るのならば、それも文学の一つの道であろう。文学者達はもう十分過ぎるほどに現実と戦ったのではないだろうか。震災に負けず、軍に負けず、戦争すら乗り切り、自らの信じるものを信じ一生を貫いた。だというのに、司書はまだ戦えと命じるのだろうか。

寛から聞いたが、司書は全くといっていいほど文豪について知らないらしい。無知だからこそ一つの戦力として捉えられるのだろうか。

考えがどんどんと悪い方向に進むのは頭痛のせいだ。睡眠薬でも飲めば、このような考えは頭から離れるだろうか。

この首を誰かに締められれば、この身は再び彼岸に渡るだろうか。それともかつてと同じよう

に睡眠薬を多量に服用して楽になるうか。きっと誰一人として止めないだろう。芥川龍之介はそういう男だった、と思われる。転生を受け入れられなかったと口を揃えて言うだろう。

寛はこの転生を受け入れ、生前と同じように文学者や文学書を守っている。場に適応し自らの強さを發揮できる寛を羨ましいと心底思う。もし芥川が寛のような強さを持っていれば、もっと違った生き方ができただろうか。寛は芥川が欲しいと思っているものを幾つも持っていた。その中で顕著だったのは、あの野心性であろう。生活欲と言い換えることもできる。

芥川は誰に対しても遠慮して生活している男だった。親にも友にも妻にも子にも。せめて家族には遠慮しないように生きようと思ったことは何度もあるのだが、自らの出生を思うと遠慮がちになってしまう。芥川龍之介は芥川家に養子として育ててもらった子である。恩を感じるのは当然だった。生涯を通じての友は何人かできたかがその友全てに本音を晒け出せたのかというところでもないような気がする。妻と子は叔母の影があり、間を取り繕うことが多かった。芥川が本音を語る前に仮面を用意する必要があり、壁を用意しなければならなかった。

対して寛はそんなものを必要としない男だった。文藝春秋を立ち上げ、他の作家を援助をし

たのは、寛が京大の時から成瀬家に世話になっていたのが大きい。この成瀬家の長男である成瀬正一は、芥川や寛と共に第四次「新思潮」を作った男である。「新思潮」発行の中心になったのは久米による部分が大いだが、金銭的な援助をしてくれたのは成瀬だった。成瀬がロマン・ロランの「トルストイ」を芥川、久米、松岡と共に翻訳しようと思っただけ、その売上を新思潮の刊行資金に当てようと考えたのである。

その過去があり、寛は他の作家達への援助をやめなかったのだろう。むしろ、自らが援助をし、良い小説が書けるのならば喜んで援助したことだろう。そういう世話を焼くのが実に寛らしく、芥川にはない部分だった。

寛は芥川がいなくなっても変わらず文学書を守り続けるだろう。芥川が自殺した後と同じように変わらずに。

そんなことを考えているとドアが開き、寛が顔を出した。普段と碎けた様子はなく、真面目な調子で声をかけてくる。

「司書が呼んでる」

「今、行くよ」

身体を起こす頃には、頭痛は治まっていた。寛も司書室へ行く用事があるらしく、並んで歩く。廊下は外の冷たく澄んだ空気が至るところに流れている。誰かが何度も出入りしていたのだろう。図書館は芥川が転生して間もなくの穏やかな空気は影を潜め、どこか物々しい雰囲気が残っている。

「司書さんに用事？」

「俺も呼ばれた」

「僕と一緒に？」

「そうだ」

「煙草かな？」

「知らん」

寛の言葉の端には不思議と力強いものがあつた。芥川を寄せ付けないような印象を受ける。

芥川は先を歩く寛の背中に、自嘲めいた言葉を送る。

「一人で急いではいけないよ。また聞けなくなっちゃうよ」

寛が文藝春秋の社長して忙しい日々を送っている頃、芥川は少し話したいことがあり社を訪れたことが二度あった。服毒自殺を行う前のことである。今ではもう何を話そうとしたのか思い出せないが、その時に話さなかったということはそれほど大事なことではなかったのだろう。

足を止め振り向いた寛の目が潤んでいた。芥川は慰めるように優しく声をかける。

「そういうこと言うのやめろ」

「ごめん」

「あの時お前は何を……」

「過去の話はよそうよ。ねえ、僕と寛が揃ってなんて、何だと思う?」

「分かったら苦労はしない」

「堀くんから聞いたんだけど、きみ最近まで助手だったんだってね。僕が来てから助手じゃなくなったらいいじゃないか。今助手を務めているのは夏目先生で。出撃は誰か知らないけれど何度も有碍書のために頑張っているみたいだ。図書館の空気も違う。それで、僕と寛と一緒に呼ばれ

た、ということとは……?」

寛は諦めたかのように息を吐き、話したらいいんだろと零した。

「特務っていうのが始まった」

「特務?」

「今までの侵蝕された文学書とは性質の違う文学書が見付かったってわけだ」

「……どっち?」

「……何が?」

「僕の転生、助手の変更、同時の呼び出し。僕達に関係がある文豪なんて限られているじゃないか。それに夏目先生……松岡か? 久米か?」

「司書に聞いてくれ」

「久米だろう?」

「……司書に聞いてくれ」

司書室に漱石の姿はなかった。特務の準備で忙しいのだろう。何度か漱石とすれ違ったこと

あるが、その顔はかつてのように獅子を思わせ、端然とした佇まいだった。芥川は昔に戻ったように丁寧に接すると、漱石はようやく思い出したかのように微笑んだ。

司書は一枚の書類を芥川と寛に見せる。そこには特務・奇襲作戦の文字があり、「受験生の手記」を浄化せよという命じられていた。浄化が成功すれば久米正雄が転生する、ということも書いてあった。

芥川はその書類を読み終え、煙草を吸った後、確かめるように司書に訊く。

「この特務が上手くいかなかった場合、どうなるの？」

「他の文学書と同じ結末を辿ります」

「というと？」

「人々の記憶から失われ、なかったことになります」

「司書さんはそれを防ぎたい、と」

「仕事ですのて」

司書の物言いが、芥川の気に障ったのか煙草を持つ指先に力が籠もる。仕事でなければ、他の

文学書と同じようになってもいい、そう言っているように聞こえた。

「僕達に有碍書を討滅してほしいということだね」

「そういうことです」

司書室に沈黙が広がった。三人の口から零れる細い紫煙だけが部屋を燻らせる。

この司書は、どれほど文学者や文学書について理解しているのだろうか。

奇襲作戦を終え、久米正雄が転生するようだが、その久米正雄はどういう久米正雄なのだろうか。

芥川や寛の知っている久米正雄なのだろうか。互いに切磋琢磨し、新しい文学を築き上げようとしたあの頃の久米正雄なのだろうか。あの頃の久米正雄ならば、どれほど嬉しいことだろうか。第四次「新思潮」を引っ張っていたのは久米だった。芥川や寛に創作をするように声をかけ、励ました青年だった。芥川や松岡や成瀬と同じような学生でありながら、戯曲作家としての一面を持ち、漱石山房で他の作家に遠慮したくないと思う青年だった。

「受験生の手記」という小説は学生の嫉妬を扱った小説である。その小説を浄化し、久米が

転生してくるのならば、学生時代の久米ではないだろう。人々の記憶に残っている久米は、芥川達が最も深いところで触れ合っていた久米ではない。松岡との一件を終え、嫉妬と失恋にその身を焦がし、寛の勧めで通俗小説を書き散らかしたあの頃の久米正雄である。そのような久米を久米正雄として転生させたくない。

芥川は重たい口を開けた。

「僕は、戦わないよ」

「おい、龍」

芥川の発言に声を荒らげたのは寛の方だった。調子こそ荒いものだったが、その目は芥川の真意を計り兼ねているのか困惑の色が浮かんでいる。

芥川達が、夏目漱石を第一の読者にした第四次「新思潮」発刊について楽しい一時を過ごしていた頃、寛はまだ京都だった。東京に居た当時の芥川と久米のことは推測でしか触れられないため、困惑で留まっているのだろう。

寛の感じている困惑を芥川も味わっていた。久米を自らと同じような人間になると思ってい

た。既に戯曲作家として名が馳せていて、俳句も上手い。寛のように通俗小説を書くのではなく、芥川のような小説を書くと思っていた。どこで墮落したのであろうか。

決定的な契機を与えたのは寛が通俗小説を書くように勧めたからであり、松岡との一連の事件に敗れ去ったからだ。しかしもっと前の段階で、久米は芥川のような道を歩まないと、心に決めたことがあったのではないだろうか。久米と芥川は同じ年の友人ではあったが、文学の道において久米の方が先輩であった。芥川が漱石山房に通うようになったのも久米が誘ったからである。

その立場が逆転したのは、大学の卒業旅行で千葉一宮へ旅行に行った時に夏目漱石から芥川と久米二人の連名で書かれた手紙だ。そこには第四次「新思潮」の感想が愛情の籠った筆致で書かれていた。芥川の「鼻」が絶賛された手紙である。

あの時、久米は悟ってしまったのではないだろうか。自分と芥川の才能の違いを。そこから、芥川と久米の道は違えてしまったのではないだろうか。もしそうであったとすれば、久米とどのような顔で再会すればいいのだろうか。昔のように再会でできれば良かったのだが、二人の間には

あまりに沢山の溝が横たわっていた。

これらのことは全て芥川の推測に過ぎず、間違っていると場所もあるだろう。確認する術は一つある。久米が転生した時に本人に訊けばいいのだが、久米の全ての告白に耳を傾けられるのか、という部分で立ち往生してしまう。

過去の話はよそうよ、と先程寛に発した言葉が胸に刺さる。芥川も久米も互いの過去しか知らなかった。会わない、というのも選択肢の一つだろう。

「僕がいなくても、事は進んだ。そうだろう？　なら僕が特務に出撃する理由はないよ」

「事が変わったんです」

「変わった？」

「俺だけでは限界がある」

「だから、僕も？　随分と都合の良い話じゃないか」

「お前なあ……」

芥川と寛の応酬に、司書の低い声が割り込んできた。芥川は涼しい顔で言う。

「何がそんなに気に食わないんでしょうか？」

「気に食わない？」

「僕に何か言いたいことがあるような口振りです」

「司書さん、それじゃ言うけれど、僕は転生したいと望んだかい？」

「……龍？」

「僕達は皆、幾つかの作品を書き、死んだ。自分達の書いた作品が後に文学と呼ばれたり、人々の記憶から消え去るなんて知らずに、ね。僕達は皆、過去の人間なんだ。本の亡霊と呼んでもいいのかもしれない」

「確かにその通りかもしれませんが。ですが……」

「食い下がる司書を拒むように芥川は続ける。」

「司書さんは僕についてどれほど知っているんだい？ 助手を務めた寛についてはどれほどのことを知っているんだい？ 知らないことだらけだろう。司書さんは錬金術師とも呼ばれるアルケミストみた
いじゃないか。僕達のことをもっと知っておいてくれたら、もっと別の姿で転生できたんじゃない

いかな？」

芥川の脳裏にはもっと若い頃の自分の姿があった。東大を卒業し、久米と共に千葉一宮に卒業旅行へ行き、そこで海水浴を楽しんだり、同人誌の話をしたり、これからの文学について語り合った。もし転生時期を選べるのなら、あの時期を指定したことだろう。

司書は重苦しい声で答える。

「それは……できないんです」

「どうして？」

「芥川龍之介という作家がどういう作家なのか、たとえ僕が強クイメージしても、多数のイメージには逆らえません。世間のイメージが優先されるんです」

司書はそう言って抽斗から将棋盤と駒を取り出した。芥川と寛の手前に数枚の駒が、司書の前にも数枚の駒が持ち駒として散らばる。司書は王将を置き、持ち駒を並べ、指しながら言う。

「文豪の転生は、僕達特務能力者と侵蝕者の文学書の奪い合いでもあるんです」

「奪い合い、か。どうして今まで黙っていたんだ？」

寛は煙草の灰を落とす、玉将を並べると力強く叩くように指す。司書は遠慮がちに駒を動かす。

「済みません……。言い訳になってしまいますが、一つは訊かれなかったからです。一つは文豪の転生と侵蝕者との関係が定かではなかったからです。ですが最たる原因は、まだ詳しく分からないことの方が多いためです。不確定のことを話し、皆さんに混乱を招きたくないからです」

「それは分かったが、もっと詳しく説明してくれ。アンタにはその責任があるだろ」

「菊池さん達文豪を転生させる方法は大きく分けて二つあることは前にお話した通りです。一つは、侵蝕者によって穢された文学書を浄化させる潜書。一つは、図書館内の文学書と転生した文豪を頼って、魂を引っ張り出す潜書」

「どちらの潜書も文学書がないとできないわけか」

「その通りです。ある文学書が侵蝕者の手に渡り侵蝕が進むと、人々の記憶から消え去ります。他の文学書が侵蝕されている間に、僕達が発見できた文学書の冊数は、この世に溢れる文学書の数と比べると微々たるものです。僕も人間ですので、侵蝕者に完全に侵蝕されてしまった文学

書やそれに関係することは思い出せません」

司書の持ち駒は少なく、寛の持ち駒の方が遙かに多い。もしこのまま寛が攻めれば、司書の王将は詰む。芥川は盤面を眺め、寛と司書の持ち駒に再び目を遣った。

浄化された文学書は図書館で保護をされる。それで事が終わるのだろうか。侵蝕者の手に渡れば、再び侵蝕が始まるのではないだろうか。司書の説明の中に、そこまでの説明はなかった。訊かれなければ答えないつもりなのだろう。

芥川が口をはさもうとした時、司書は自らの敗北を認め、駒と将棋盤を抽斗にしまった。

「最近分かったことがあるんです。耗弱速度こうじやくの違いです。つまり、侵蝕者に侵蝕される速度が各々で違うことが分かりました。それは各々の精神状態が原因です。侵蝕されている久米正雄さんの精神状態はどうなんでしょうか？」

芥川は久米の精神状態までは分からない。芥川と久米が最も親しかったのは、一高から東大卒業前後の時期であり、以降は別の道を歩んだ。手袋の隙間から覗く指先程度しか分からないだろう。寛が口を閉ざしているのも同じ理由からだった。

「受験生の手記」という作品が嫉妬や受験生の不安な心持ちを描くものならば、侵蝕速度も早いと考えられるかもしれない。芥川が戦線に加わらなくても事が進むが、もしも芥川が戦線に加わらないことによって、完全な侵蝕が起きてしまえば、久米正雄という文豪の軌跡は人々の記憶から消え去る。それは司書を初めとした人間だけにのみ起こる忘却なのだろうか。芥川達転生した文豪の間でも、起こり得ることなのだろうか。もし芥川達の間にも忘却が起これば幸せだろう。しかし、人間達のみならば、おそらく芥川は味わったことのない罪を味わうことになる。一人の友として絶対に避けたい。

芥川は久米のために戦うのではなく、自らのために戦うと決めた。その心持ちには、久米との再会を一つも喜べない芥川自身の過去があった。芥川は三十五歳の夏に自殺をした。自身最期の作品を久米正雄に託して。その事実が、芥川と久米との間に横たわっている。

明治に蒔かれた種が大正に花開き、更に大きな花を咲かせようとする頃、芥川達は夏目漱石や森鷗外が問われた時と同じように問われた。すなわち、昭和の文学について答える必要がある。あるいは、大正文学の行き詰まりについて芥川達はどうするべきなのかと問われた時代だった。

た。

芥川が自殺をし、その最期の作品を久米に託したのはそんな時代だったのである。そんな二人が再び話をするなど可能なのだろうか。否、会わない方が双方のためなのではないだろうか。寛とだけ会っている方が久米本人にとっても心安らぐのではないだろうか。会う会わないということは、久米が転生してから考えても十分間に合うだろう。

自分のために戦うと決めたが、だからといって友である久米を見捨てていいのだろうか。再会には喜べないのは二人の生前のせいである。転生してから、再会を喜べない理由を作っていいのだろうか。文豪芥川龍之介の道筋を作ったのは久米だった。その事実を無視して、自らのために戦えるのだろうか。

自らのエゴを優先し、久米を放っておくわけにはいかない。久米の転生のために力を尽くす時である。久米の文学を消させるわけにはいかない。今回の浄化で全てが終わると思う一方で、何度も侵蝕されるかもしれないと思う。晩年の芥川が歯車に苦しめられたかのように。

芥川はまだ自らの文学書が侵蝕された経験はなく、浄化された経験もない。けれども、自らの

精神が自らの負の考えや感情に支配されてしまう苦しみは人一倍分かる。

「司書さん、僕は、やるよ」

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いします」

芥川は寛の方へ身体を向き、改めて言う。

「寛も、改めてよろしくね」

久米の転生の前に、寛に何か話しておかなければならないことがあるような予感を覚えた。しかし芥川はそんな心を見せず、変わらない調子で微笑んでみせた。

※

47 芥川が特務に参加を決めた時、寛は懐かしい胸の痛みを覚えていた。胸底から嫌な記憶が蘇

ってくる。異様に光る眼を、どこかで向けられた記憶がある。

芥川の決意とは裏腹に、他の文豪と比べて僅かに練度の低い芥川は侵蝕の影響を受けやすく、休養をとることが多かった。その度、特務は足止めとなった。他の文豪を結成して進めばいいのではないかと進言があったが、司書は承諾しなかった。曰く、奇襲作戦を攻略するためだけならば、それでも良い。しかし文学書の浄化や久米正雄のことを思うと芥川を外せない、とのことだった。

奇襲作戦が始まってから最前線に居た文豪は芥川が休んでいる間は暇いとまであり、各々の休養に充てている。寛もその一人であった。

寛の肉体は休養を取れば休まったが、精神の具合がどうにも休まらない。侵蝕された文学書の最深部へ進む頻度が増える度に、自身も「受験生の手記」の嫉妬に侵蝕されているようだった。

寛は「受験生の手記」の深部で、久米正雄と芥川龍之介が話し合っているのを目撃した。立ち聞きする気はなかったのだが、咄嗟に身を隠してしまった。その会話は二人の過去をなぞって

いるような会話だった。寛が久米や芥川を目撃しているということは、芥川も久米や寛を目撃しているのではないだろうか。

この、烈しい嫉妬を、芥川も浴びているのだろうか。

寛が寝台に顔を出すと、芥川は横になっていた。黒い手袋は外す気がないらしく、その心を守るかのようにつきり両手の平を覆っている。芥川は寛がやってきたことに気付くと穏やかな眼を向ける。あの時の芥川の眼の光は寛の思い過ぎだったのだろうか。

芥川と久米と寛は互いに互いを意識している。ゆえに、寛は有碍書で見たことを芥川に話すかどうか悩んだ。

芥川に小説を書かせたのは久米であるし、久米を絶望させたのは芥川である。失恋した久米に金銭があれば安心するだろうと大衆小説を書かせたのは寛だった。そして、久米が大衆小説を書くのに反対したのは芥川だった。

芥川は久米が自らと同じように芸術性の高い小説を発表するだろうと思っていたのかもしれない。芥川に小説を書くように誘い、鼓舞した久米だからこそ、書き続けるであろうと思ったの

は当然なのかもしれない。

久米が芸術性の高い小説を書かないようになったのは、芥川自身の影響が大きいことを彼は気付けているのだろうか。芥川が賞賛を浴びたことにより、久米は輝かしい文壇から陰日向に追いやられたことを、理解しているのだろうか。

夏目漱石を第一の読者とした第四次「新思潮」の絶賛。あの手紙が芥川と久米の明暗を分けた。京都に居た寛も、少なからず芥川に嫉妬を覚えていた。芥川と久米の連名で送られ、封を切った久米のことを思うといたたまれない。

寛が「受験生の手記」で久米と出会ったことを話さなくても、久米が転生すればいずれ芥川と出会うことにだろう。寛は心のどこかでそんな楽観を覚えながらも、もしかすれば、久米も芥川とは会わないと思っているかもしれないという不安も渦巻いている。

二人に横たわる嫉妬と過去は、二人だけで乗り越えるにはあまりに、厳しい道程であった。互いが互いのことを思い、会わないという選択を採ることは有り得ないことではない。

司書の言葉が寛の脳裏に浮かぶ。寛も芥川も生前の印象が先行し転生している。芥川が転生

に時間を要したのは、その過去の自殺が原因であろう。世間が芥川龍之介という名前を耳にして思い描く印象が十中八九晩年のあの姿であろう。青白いインテリ、厭世主義……。これらは芥川龍之介が自殺して間もない頃、世間を賑わした言葉の数々だ。

晩年の芥川は久米に最後の告白録を託した。そうして少し経った夏に自殺した。その自殺がもたらした影響は、久米や寛個人のみならず、あの時代の文壇全体に波紋を呼んだ。

それでも寛は大衆小説を書き続け、久米は寛のように割り切れることはなく、かといって芥川のように死を選ぶこともなく、寛と芥川の間を彷徨うように生き続けた。成瀬が死に、寛が死に、松岡と和解をして生き続けた。しかし、そんなことを世間は知らない。そんな印象を久米正雄という男は持たれない。

「持たれる印象はこの『受験生の手記』を巢食っている嫉妬と微苦笑という言葉を発明した一部分だろう。」

「この奇襲作戦というやつは今まで成功した……?」

芥川の言葉に我に返った寛は、芥川を励ますように笑う。

「したよ。だから幸田露伴が転生しているんだ」

「彼と久米を一緒にしちゃいけないよ寛……ここからは僕の想像だよ。ちょっと聞いてくれないかな？」

「想像？」

「そうさ。司書さんの説明のどこにも、文学書が再び侵蝕されない、なんて言葉はなかった」

芥川の言葉に寛は緊張を帯びた声を上げる。

「想像だろう？」

「司書さんに聞いた？」

「……いや」

「司書さんは訊かれなかったら答えない人だ。あるいは、分からないことが多いと答えられない人だ。奇襲作戦が成功したとして、久米が転生できたでしょう。それで終わりになると思う？ 侵蝕者が人々の負の感情から生まれたという話が正しければ、この文学書は危険なんじゃない？」

語る芥川の眼に段々と異様な光が輝いてくる。寛は芥川の眼を見て、芥川と最後に会った時のことを思い出した。寛と芥川はその時、直面するのを避けていた。寛が社長を務めていた文藝春秋は、他の出版社と同じように全集や叢書そうしょの販売合戦をしていた。当時流行作家であった芥川にも話は及んでいたが、過去に苦い経験をしたこともあり芥川は拒む気であった。それでも、こうして巻き込んでしまったのは、寛が頼んだからに他ならない。

芥川や寛達が席を共にしたとある座談会の終わり、他の出席者と共に寛は車へ乗り込もうとした。その時、芥川はちらりと寛を見た。その眼には異様な光があった。寛はすぐに、芥川は何か話したいことがあるのだろうか、と分かった。けれども、「小学生全集」の騒動に巻き込んでしまったこともあり直接話すのは避けたかった。話し足りないのだろうか、と思った。もっと何か話したいのだろうか、と思った。しかし車は既に走り出し寛と芥川は、離れていった。

今になって思うと、芥川はあの時、他の人間にそうしたように、寛にも優しく接してくれたやうな気がしていた。

芥川はあの時、もう、自殺を決意していたのだから。寛宛の遺書の日付は、そういう出来事よ

り前であり、芥川は過去の精算のために寛と何か話しがしたかったのだろう。

寛は今の芥川に、あの時と同じ異様な光を見て、その真意を汲み取ろうとしたが、汲み取るこ
とができず尋ねた。

「何を考えている……？」

発した言葉は、かつてないほどの怒りに震えていた。芥川が言っていた通り、芥川は寛に会
うと二度、文藝春秋を訪れた。自殺する月の上旬のことである。しかし、二度とも、寛は居な
かった。そして、芥川は自殺し、永久に会えなくなった。

あの時何を話そうとしていたのか、今更掘り返すようなことはしたくない。しかし、芥川の眼
にあの時と同じ光が輝いているのならば、寛はその言葉に胸を傾けなければならぬ。

芥川の眼に輝いていた異様な光は、寛の言葉を受けゆっくりと消え去っていった。しかし、芥
川の胸には、異様な光が齎もたらした思いが燻もっている。寛はその思いが、芥川の死と久米正雄の転生
についてである、とすぐに分かった。

「そうかもしれないが、お前は何を考える気だ？」

「僕は久米に感謝しているんだ。きみだってそうだろう？ あんなに楽しく小説を書けたのは、久米のお陰なんだぜ？」

芥川は懐かしい日々を思い出し、笑った。寛もかつての日々を思い出し、笑う。

「ああ、楽しかったよ」

そして、芥川の真面目な調子で現実へ引き戻された。

「だから、この文学書が危険であろうと、僕は久米正雄という人間が、久米正雄という小説家が書いたこの文学書を消させるわけにはいかないんだ」

芥川が言ったことが事実であるとすれば、この文学書は再び侵蝕されるかもしれない。芥川はこの文学書のみ危険性を問うたが、この文学書だけではないだろう。寛の脳裏に司書の言葉が蘇る。

『最近分かったことがあるんです。耗弱速度の違いです。つまり、侵蝕者に侵蝕される速度が各々で違うことが分かりました。それは各々の精神状態が原因です』

芥川が不安定であることは、文豪ならば誰でも知っている。文学書の浄化の最中に、芥

川の不安定な精神が侵蝕され、芥川の発表した作品の侵蝕も始まっているのではないだろうか。司書達錬金術師も文学書と侵蝕者と文豪の関係は詳しく分かっていない。寛達はまだ芥川の文学書を発見していないのだ。

文学書よりも先に文豪の精神が侵蝕されている時、その文学書の侵蝕はどうなるのだろうか。黒く染まっていないとは言いつれず、黒く染まっているとも言いつれない。文豪の侵蝕された精神は休養を取れば元に戻る。そうなった時、まだ見ぬ文学書の元に戻るのだろうか。

もし、文学書が完璧に侵蝕され、人々の記憶から消え去れば、転生している文豪も人々の記憶から消え去ってしまうのだろうか。他の文豪も、忘れてしまうのだろうか。

寛も、芥川のことを忘れてしまうのだろうか。

誰も、忘れないと保証できないことだった。

一度忘れてしまえば、思い出すことは、できない。皆^{みな}忘れてはならないと信じ、戦っている寛がこの奇襲作戦で芥川と久米の過去に触れたのは、偶然ではないだろう。

久米の感情や記憶の一部が侵蝕され、侵蝕者が浄化に抵抗しているのかもしれない。寛が潜

書したからというのも関わっているかもしれない。ということは、芥川も久米の何かに触れていると考へてもおかしくない。

芥川は寛とは違ひ、久米の近くに居た。

「奇襲作戦で何か見たか？」

芥川は黒い手袋をした片手で右目を覆う。寛はその所作で、芥川が何を言おうとしているのか分かつた。

「……歯車が見えるんだ」

「……見えていてもおかしくないだろう」

「だからかな、作戦の時、僕を見たよ」

「俺もお前達を見たよ」

「それは久米の記憶の中の僕だろう。僕が見た僕は、侵蝕者だよ」

見間違えだろうという言葉が寛の口から飛び出しそうになり、飲み込んだ。もしこれが芥川以外の発言であれば、寛は不安を取り除くために見間違えだ、幻覚だ、と言いつ切つた。今の相手

は芥川であり、自らの印象を操った男である。

「文学書が侵蝕されているのならば、侵蝕者にその作者の記憶や感情に宿る、とでも？」

「どう思う？」

「……否定できない」

「しかし、その文学書の侵蝕者に必ずしも、記憶や感情が宿るとは思えない。侵蝕者は、妬みや嫉みを増幅させて、僕達の前に現れるとも考えられるよ」

「その侵蝕者はお前に何か言っていたのか……？」

「特に何も」

芥川は、久米や久米の文学書が再び侵蝕されると確信している。侵蝕者と戦うことで芥川の精神も侵蝕される。その果てにあるのは、芥川の死である。芥川はもう、死を覚悟している。自らを犠牲にしても、一人の友として浄化する気にいる。

寛はあの夏、涙と雨が流れたあの時のことを思い出す。あの時の寛は、芥川の自殺の前触れを察知することができなかった。芥川は自殺を決心し、心残りのないように優しい人間であり続け

た。寛はその芥川の心境を見抜けなかった。しかし、今は、芥川がそういう男であると知っており、その癖を見抜ける。過去と同じ失敗を繰り返し、芥川が現世から離れるのを見届けたくない。例え、その死に顔に平和な微光が漂っていようと、芥川の自殺を受け入れたくなかった。

芥川は自らの生や家が選べなかったゆえに、自らの引き際を選んでしまった男である。寛や久米はそのどちらも選べず、ただ昭和という時代を生き、二度目の世界大戦を生き抜いた男達である。寛は小説家という肩書以外にも幾つかの肩書を持ち、時代を駆け抜けた。しかし久米はそれほど強かな男ではなかった。今も自らの文学書が侵蝕されているなど思いもせず、転生の時を待っていることだろう。

しかし、転生する久米は世間の印象によって形作られた久米である。寛や芥川が当時よく接した久米ではなく、嫉妬と戦い、破れ果てた微苦笑の人であろう。芥川や寛に取り残された男、という影もあるかもしれない。どのような久米が転生されるのか分からないが、きっとそのどこにも芥川や寛の創作意欲に火を点けた久米の姿は見取れないことだろう。

久米と再び出会えることを嬉しいと思う一方で、世間に形作られた久米と出会う寂しさや、や

るせなさもある。これらは、かつて味わったそれとは違う性質だった。一人で寂しかろうという寛の心情を察し、第四次「新思潮」に誘ってくれた大事な友である。あの時も久米達に誘われなければ、寛も芥川も小説家になっていなかったことだろう。そういう久米を、寛も芥川も知っている。

しかし久米の創作への熱意を完膚なきまでに奪い去ったのは芥川であり、芥川と同じ道では敵わないと分かり大衆小説家として花開いた寛でもあった。あの時の久米の前には、どちらの道にも成功した友の姿があったがために、半端者として自らの半生を綴ったような大衆小説を発表するしかなかった。

だからこそ、寛は転生してくる久米と対面しなければならぬ。世間によって形作られた久米がそのようなになってしまったのは、寛達によるところが大きい。そうして、かつてのような日々を取り戻せるのならば取り戻したい。芥川の自殺によって終わってしまったあれから日々を。

久米の嫉妬の原因が芥川であり、その嫉妬という負の感情が侵蝕者と関係しているのならば、久米が転生したところで芥川とは会えないのではないだろうか。久米が、芥川の死後、その関係

や感情を全て精算したのであれば話は別だが。侵蝕者の影響を受け、芥川に負の感情を向けることは大いに考えられる。芥川は、久米と会わない気ではないのではないだろうか。

「お前は久米と会えるのか？」

芥川は寂しく笑う。

「僕は久米と会わない方が良いと思うんだ。寛も見たんだらう？ 久米の中での僕は久米の精神を荒らす者でしかない。なら、会わない方が幸せなんだよ……」

「本当にそう思っているのか……？」

「信じられない？」

「俺は久米と会うぜ」

「だと思った」

「久米をあんなふうにしたのは、俺達のせいでもある。幸せだとかどうとか考えるのは、現実を見てからでも間に合う」

「相変わらず頼もしい」

「都会っ子とは違うんだよ」

「羨ましい限りだよ」

芥川の口から零れた羨望に、寛はたしなめるように言う。

「ここには両親も細君も子供もいないんだ。もっと生きたいように生きても、誰も何も言わない。……誰も、何も言わないんだ」

ここには芥川の言動について言及する者はいない。芥川が暑苦しいチョッキを脱ぎ捨てれば、皆歓迎することだろう。随分時間がかかったじゃないかと笑顔で迎えることだろう。ここに居る文豪は、芥川龍之介という男の生涯を知っている。皆、心のどこかで芥川が暑苦しいチョッキを脱ぎ、柔らかい青年の一面を覗かせるのを待っているのではないだろうか。暑苦しいチョッキを着たまま都会人として生き、死んだこの男は、文学に対しては誰よりも純真な態度で追いかけていた。柔らかい胸の内を晒し、追いかけて、求め続けた。この世の一切が娑婆苦であろうと、追いかけて続けた。それだけしか縋るものがないように。久米や松岡が、文学青年だったと口を揃えて言うのは当然なのである。

今、かつて純真に追いかけていた文学書が侵蝕され、その姿を亡きものにされかけている。それも友である久米正雄の文学書が。

「……そうだね、考えておくよ」

芥川は微笑した。寛は何も言わず、この男は変わらないだろうとだけ思った。再び同じ過ちを繰り返してはならないが、寛一人ではどうにもならないことだった。芥川に再び自殺されるのは防ぎたいが、寛が言っても変わらない。芥川は自らの行為が自殺であると考えていない。友の文学を守るために戦うとしか考えていない。

久米が転生すれば、何か変えてくれるだろうか。寛は全く無根拠にそう期待するしかなかった。

※

その日、図書館の空気は普段と違うものだった。一段と冷え、中庭へと続く扉は締め切られ、皆が皆示し合わせたかのように暖炉の前に集っていた。窓の向こうは一面銀世界が広がっている。寛は司書に奇襲作戦の報告をしようと司書室に足を運んだ。中では夏目漱石が何か話しているところだった。仕事のことらしい。察するに、寛が来る前から何度か同じ話をしており司書が折れないのだろうか、漱石の調子は少し烈しいものになっていた。寛は後にしようかとも思ったが、司書は寛の顔を見るなり、漱石の言葉を聞き飽きたように邪険に扱う。

「夏目さんの言いたいことは分かりました。菊池さん、また助手をよろしく願います」
振り返った漱石の顔は先日と比べると幾分か青いように見えた。

「大丈夫ですか？」

「ええ大丈夫です。菊池くん、後は頼みますよ。私にはやる必要がありますので」

漱石はそう言って安心したように柔らかい笑みを浮かべる。寛が助手と潜書という二足の草鞋を履いていたように、漱石にも何かやることのあるのだろうか。漱石の返答の前に司書の顔を盗み見たが、司書はそのような命令を出していないようだった。ということは、漱石が独自でや

っていることなのだろう。

「やること？」

「未だで終わった小説があるでしょう？ あれをそのままにしておくのが気持ち悪くて。もう少

しで一区切り着くんです」

「少し休んでからでも……」

「私もそうしたいんですけどね、どうやら続きを待っている読者は多いみたいでして」

「……ご迷惑をおかけします」

「構いませんよ。昔に戻ったように案外楽しいので。あなたは何か書かないんですか？」

「俺ですか？ 俺はちょっと……」

「菊池さん、報告を」

司書に急かされ、漱石は司書室を後にした。寛は今回の奇襲作戦を完遂したことを報告する。

久米正雄が無事に転生できたことや転生の間に得た報酬のことも。報告を聞く司書の顔が晴れやかではないのは、久米正雄が転生したというのに、図書館の空気が依然としてどこか暗いから

だろうか。

「話しておきたいこともある。これはまだ推測の域だが、知っておいてほしい」

寛は、芥川がある時話していた再び起こるかもしれない侵蝕についても話した。司書は固い顔で寛の話聞き、煙草に火を灯し、一息吐いた後に答えた。

「……ないと言いきれませんか」

「何か対策は？」

「精神状態の管理ぐらいですかね……。一番早くて幸田さんでしょうし、彼を中心にしています。すが、打つ手は多くありません」

「やってくれるだけマシだよ」

寛は話を終えたことを示すように煙草に火を点す。

「ところで、どうしてこんな空気なんでしょうか？」

寛は青みがかった煙を吐き出し、踏み込まれるのを嫌うかのように低い声で確認する。

「何が？」

「久米正雄さんが転生して喜ばしい雰囲気ではありませんよね？」

「色々あったんだよ」

三人のことを伏せたのは、司書にそこまで報告しなくても良いだろう、という寛の独断だった。これは寛、芥川、久米という三人の友人の内、解決しなければならぬことだからだ。

司書は寛の言葉を聞き納得したのか、他の報告を聞く。

「他に何か報告することはありますか？」

「ない」

「じゃ、今日はもうゆっくりしてもらって構いませんよ。今日は皆、安息日ですので」

寛は灰を落とし、司書に言う。

「……助かる」

「何がでしょうか？」

「独り言だ」

「でしたら僕も独り言を。僕はあくまで司書としてここに居るだけです。菊池さん達の関係にま

で首を突っ込むのは失礼だと思うので」

寛は短くなった煙草を吸いながら、司書の言葉に疑問を懐いた。

「侵蝕に繋がる可能性があっても、か？」

「構いません」

司書の答えに、寛は動揺し、煙草を落としそうになった。司書の顔を見るが冗談で返事をしたような色は見えない。司書は落ち着いた調子で続ける。

「侵蝕には精神の状態が関わっていると分かりました。僕に命じられたのは文学書を守ることであり、文豪の精神の管理までは言い渡されません。僕が一喜一憂することがあるように、菊池さん達も同じように一喜一憂するでしょう。だから、踏み込みません」

「……成長したな」

「仕事ですから」

「じゃ、安息日、楽しませてもらう」

寛は煙草を灰皿に押し付け、司書室を出た。

久米正雄は図書室の端で読み物に耽けているようだった。久米の周りには何枚もの紙が散らばっている。寛が隣に腰掛けても見向きもしない。寛の方も何も言わず、久米がその紙の束を読み終わるのを待っている。久米が読んでいるのは、誰かの原稿らしかった。一行十九文字の原稿用紙。寛はテーブルに散らばっている原稿用紙を目にすると、セピア色のインクで、百八十九と書かれている。

原稿から顔を上げた久米の眼鏡の奥の目は輝き、潤んでいた。頬は微かに紅くなっているようにすら感じる。その目と寛の目が合った。久米は寛に熱い調子で語ってくる。

「相変わらず良い小説だよ」

寛は久米の心持ちが分からなかったが、漱石山房に出入りしていた久米と芥川と寛の間にあつた熱量の差を思い出してた。

「お、おう……そうか」

「読んだ？」

「いや」

「僕が第一の読者なんだってさ。菊池くんも読むべきだよ」

「お、おう。話しが終わったらな？」

「話？」

「龍のやつ、お前には会いたくないってよ」

単刀直入に切り出すと久米の顔から熱が引き、冷たいものになった。

「……そう」

と呟いた久米の目の端には涙が浮かんでいる。

「寛はどうして？」

「何が？」

「寛はどうして僕と？」

「恩人だからな」

「芥川くんが会いたくない気持ちも分かるんだよ。僕も芥川くんも、寛も、皆もうあの頃とは違う。でも僕達は皆、あの頃から離れられない。夏目先生だってそうさ」

第百八十九回目の「明暗」原稿が、寛の前に差し出される。

久米の言ったことは、転生した文豪にとって仕方のない部分だった。肉体は新しくなるうが、その精神は全く新しくならなかった。寛はその部分を割り切り、久米と芥川は割り切れず日々を過ごしている。

「龍は会いたくない。お前は？」

「会っちゃいけないんだ」

「……会っちゃいけない？」

久米の言葉に、寛は眉を顰^{しか}め、怪訝な声を上げる。

「あの本の中で、僕がどれほど彼に嫉妬していたのか、見ただろうか？」

「ああ。でもあれは……」

「また、ああなる可能性がある。だから、僕は芥川くんに会っちゃいけないんだ」

「龍に嫉妬しなくなったら会うってか？」

「違うよ」

「そう聞こえたぜ？」

「僕の気持ちを整理できたなら、会うよ。ただ、今はまだその時じゃないんだ」

「龍が死んで、もう九十年以上経つんだぜ。もう、できてもおかしくないだろ……。松岡とも和解したじゃないか」

久米は何とも答えなかった。

久米と芥川が会わない理由は分かった。二人の言い分は理解できる。

しかし、間に挟まれた二人の友人である寛は堪ったものではない。久米個人の気持ちの整理がつくまでどれほど時間が必要なのだろうか。二人の調子に合わせていれば、事はいつまで経っても終わらない。

言いたいことの意味も芥川と久米の情も分かる。が、間に挟まれた寛個人の行き場を失っている情はどうすればいいのだろうか。その情は、怒りという熱を有し、寛の喉から溢れ出た。

「俺も嫉妬したさ。お前にも龍にも」

久米という男も、熱を持っている男だ。寛と芥川に筆を執らせた男なのである。自らの失恋を

創作の糧にできた男なのである。そんな男が、一人の親友に対して気持ちの整理がつかないからまだ会えないというのは、納得できない。

芥川の死後、久米は気持ちの整理がつけただのではないのか。久米はその記憶が曖昧になっているのだろうか。ゆえに、会えないのだろうか。あるいは久米が言っている通り、芥川が最期の作品を久米に託したから、会えないのだろうか。芥川に嫉妬してしまうから会えないのだろうか。

「嫉妬するからなんなんだ。あいつには才能があったよ。英語も上手い。本も読める。小説も上手い。嫉妬しないわけないだろう。それでも、アンタと龍は親友だったじゃないか。そんな理由で会っちゃいけないわけないだろう……」

久米は微笑を浮かべ、応じる。

寛はいつの間にか自らの目に浮かんでいた涙を、手袋を外し、ハンカチで拭う。

「菊池くんの言う通りだよ。向こうにとっては親友だろう」

「お前は誰よりも動けるんだ。お前がいなかったら、俺も龍も小説も戯曲も書かなかったんだ」

「……きみはきみだね。ありがとう」

久米はそう言って「明暗」の原稿を全て片付けると、立ち上がり言った。

「芥川くんと会う準備をしてくるよ」

去り際、久米は笑った。寛は両の目頭をハンカチで抑え、肩を震わせ咽むせび泣いた。

※

その日の夜、エントランスの暖炉の前に人影はなかった。何脚の椅子とテーブルだけが残っていた。案内状を受け取った一人である芥川龍之介は、自分の他に後三名呼ばれたのだろうと分かった。案内状には名前が書いてなく、誰が主催したのか分からない。芥川は空いている席に腰を落ち着かせ、煙草を吞もうとしたが、司書から何度も禁煙と言われたことを思い出し、胸元に伸ばした手を口元に持っていく。

その時、扉の影から見知った顔が出てきた。久米正雄である。久米は芥川に目礼をすると空いている椅子に座った。二人は久し振りの再会にも拘らず、一言も言葉を交わさなかった。暖炉の中の木が燃える音のみが、二人の沈黙を癒やす。

芥川は残りの二人が、谷崎と佐藤であろうということはすぐに分かった。四人は生前、ある日の夜、あるホテルのロビーの焚き火の前に集い、夜を徹して芸術の話に花を咲かせたことがある。あの夜、誰が何と言いホテルのロビーに集まったのか今では思い出せない。ただ、最初は佐藤と芥川がホテルの一室で話していたことは覚えている。それがいつの間にかホテルのロビーに移動していた。そこに谷崎が合流し、久米も来たのである。

久米は懐から何枚もの原稿用紙を、芥川に差し出した。

「夏目先生の『明暗』」

「……もう読んだよ?」

「百八十九回目だよ」

久米の言葉を受け、芥川はすぐに原稿用紙に視線を落とす。同時に胸の内には、何故久米が

先に読んだのか、という強烈な嫉妬の情が湧き出てくる。

芥川は烈しい動揺や嫉妬、新しい小説を富む感動に襲われ、胸の内が一杯になっていた。この原稿を、あの時代の青年はどれほど待ったことだろうか。原稿用紙の最後には、続くという文字があり、芥川は歓喜に震え上がった。

いつの間にか佐藤と谷崎も来ていたらしく、芥川は自然と二人に原稿を手渡した。鼻の奥が痛くなり、視界を渗む。芥川は片手で目元を拭う。

「先生は良いものを書くね……良いね……」

四人が読み終え、自然と夏目漱石の文章のことやこれまでの「明暗」のことや今後の「明暗」の展開について話すようになった。話題はそれから死後の文壇や評論、国内の小説のみならず海外の小説にまで及び、時には詩歌や古典にまで広がる。夜は森森と深くなっていた。久米と芥川は昔のように話し、笑い合った。

その談笑の最中、芥川はこういう疑問を久米に投げかけた。久米はすぐに答える。

「先生はどうして続きを書いたんだろう？」

「僕にも分からないよ。先生に訊いてみないと」

「手紙を書こうか？」

芥川は夏目漱石に宛てて手紙を書き始めた。芥川が書き終えると久米に渡す。芥川は久米が書き終えるのを待ちながら、この場をどうして久米が用意したのかを訊くか悩んでいた。

芥川は久米と会わない気でいたため、もし久米一人だった場合何かと理由をつけて会わなかった。しかしこうして複数人となると相手のこともあり、芥川と久米の事情だけ退去するのは失礼にあたる。久米は芥川のそんな性質を見抜いて、佐藤と谷崎にも案内状を送ったのではないだろうか。

いつしか日が昇っていたらしく、窓から射し込む朝日が仄かに四人を照らす。佐藤と谷崎は欠伸を零し部屋に戻り、久米と芥川だけが残った。二人は先程まで饒舌だったことが嘘のように再び沈黙に徹する。口を開いたのは芥川であり、この会を主催してくれたことに感謝の言葉を述べる。

77 「久米、ありがとう。良い夜だったよ」

久米の目から、涙が零れ落ちる。久米は幾つかの言葉を芥川に向けたようだが、震えた唇はどれも正確な言葉として芥川の耳には届かなかった。芥川は久米に優しく声をかける。芥川の声もどこか震えていた。

「時間はあるんだ。ゆっくりでいいよ」

「芥川くん、僕はきみに会うのを恐れていたんだ……きみが僕のために戦い、ここに連れ出してくれたことは感謝している。僕の書いた文学を、きみや寛が守ってくれてすごく感謝している。だから知っているだろうか？僕はきみに嫉妬した。きみや寛に嫉妬した。僕にはきみ達のような才能がなかったんだ」

「そんなこと……」

「夏目先生に認められたのは芥川くんだったじゃないか」

涙で濡れた眼の内には、烈しい嫉妬が燃えている。向けられたことのないほどの嫉妬だった。芥川は堪らず言葉を失った。それでも、視線は逸らさず、久米の嫉妬を真正面から見据え言葉を待つ。芥川が黙していると、久米は居心地の悪さを覚えたのか、視線を逸らす。

「だから……こうして会うのが辛くて、でも会わないとどうしようもなく。進みたかったんだ……。また、乗り越えられると思ったんだ。だから、佐藤さんと谷崎さんを利用した。僕達の思いつきを汚した。僕一人では、きみと会ってはいけないような気がしたんだ……」

久米はいよいよ背中を丸め、泣きじゃくる。芥川は久米にかける言葉を見つげ出そうとした。しかし、どれも適切ではないような気がした。芥川は手袋を外し、久米の頬に流れる涙を拭い、優しくその眼に語りかける。

「僕達は親友だよ。きみが何を思っているよ。僕はきみを親友と呼ぶよ。それに、僕もきみに嫉妬したんだ。きみがいなくなったら、小説なんて書かなかったよ。お互い様だよ」

「お互い様なんかじゃないよ……」

「そうやって責めるのは止そうよ。僕もきみも十分苦しんだじゃないか」

澄んだ朝日が、久米と芥川を包む。久米は眼鏡と手袋を外し、雫を拭うと芥川の手を取った。冷たい手だった。久米は微笑し、芥川も釣られて微笑した。

「またよろしく」

「うん、またよろしく」

二人は夏目漱石に手紙を出した後、中庭へ足を運んだ。芥川は懐から一本の煙草を取り出し、久米に差し出す。久米は受け取ると火を点す。一服すると咳き込み、重いねと笑った。芥川は、それが良いんだよと啜えた煙草に火を点けた。

〈了〉

ゆきど
雪解け

発行日 2018年3月25日 初版

原作 文豪とアルケミスト

印刷 ちょ古っ都製本工房

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ
近藤貴弥 (出藍文庫)

連絡先 : stkk7.920521@gmail.com

校正 : 鈴月詩希 (月あかり街道)

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。
